

眞 生

第 八 卷 第 二 十 號

- 我々は自由を尊ぶ、だからまた他人の自由をも奪はずにはゐられない。此の意味に於て、最も自由なるものは信教の自由である。
- 然に多くの人々はさすれば信教の自由を許さない。就中、多くの既成教團に於て然りである。世に異安心者と云ふものを嫌ふのは即ち此の仲間である。
- 乍然一面から考へれば自分の一生を托して永劫に生きやうと云ふのが宗教の問題である限り、その祖師と道を同じくしやうと云ふ教團が之と異なる安心者と同一なりとする事は之を嫌ふのも亦無理からぬことである。
- 然しそれだからと云つて、自分と同じ信仰でないこと云ふだけで、之を排斥したり、之を悪罵する事云ふことは果して正しいやり方であらうか。少くとも一般として之を見たとき、それは必ずしも正當なことではあるまい。
- 同じ祖師を上に頂いて、その下に二人の異見があつたとき、其の中の何れが正しいかはさう簡短に片づきかゝれるものがある。甲からは乙を異安心と云ふ時、乙からは甲こそ異安心と云はれうるではないか。
- 甲には自分には未だ確たる信仰も無き人が徒に世間の噂さにかられて他人を異安心扱いをする人がある。乍然斯くの如きは最もその人として謹むべき事ではないか。世に之を妬む人を害し、又自らを害するものではない。
- 古來幾多の宗教的偉人を見るに、多くの場合、之等の人々こそはいつも當時の既成教團からは異安心者だとして追はれた人である。而も其の實果して何れが本當の正しい信仰の人であつたのか。
- かゝる云つて、私共は自ら徒に異安心者を以つて任ずるものではないが、此の意をに於て、私共は亦徒に異安心者と云はれることを決して恐れるものではない。(念) (一一、九)。

現代人の求むる宗教

目次

如來の眼	魁子
現代人の求むる宗教	念
私の淨土觀	土屋觀道
アウグスチヌスの自覺	土屋觀道
生きる妙味	中野魁子
念佛と生活	土屋觀道
吾明便り	

如來の眼

如來は生きてみえます。皆の内に生きて、皆を内から生かさうと、ますく働いてみえます。

イエスも「神は死にたる者の神に非ず、生ける者の神なり」と云つて居られます。それを如來様と云へば、死人ばかりを極樂へ寄せ集めて遊ばしてみえる方のように思つてゐる。如來様は死にたる者の如來に非ず、生ける者をして、ますく正しく生きさせようとして「生き給ふ如來」である。

「死にたる者は、死にたる者に葬らしめよ、爾は往いて神の國を宣べよ」と、それを坊さんと云へば、一日死人の世話に日を暮してゐます、そんな時には自分が死人になつてゐる。人の世話はいらぬことである、自分が眞に生きればよい。「佛の捨てしめ給ふものは即ち捨て、佛の行ぜしめ給ふものは即ち行じ、佛の去かしめ給ふものは即ち去く。」稱禮行すと雖も、自の行を行するに非ず、如來の行を行するなり」と生活の一節くがピンリときまつて來た時に、初めて本當の活き方であります。

自分の裡に、眞に此の「如來の眼」が開いて來て、其の如來の眼より「如來の手」が出、「如來の聲」が出、「如來の心」が出て、ドンく仕事かとして貰へるようになれば、職人をやつても、先生をやつても、巡查をやつても、皆ながら大傳道であります。傳道とは眞に此の「生に徹する」ことであります、だから誰にでも出来るし、誰でも出来るやならぬことである。(魁)

□現代の人たちは必ずしも古い宗教を求むるものではない。それは新舊を求むるものではなくて、たゞひとへにそれが自分を眞に生かしてくれるものを求めてゐる。

□だから、私共は其の宗教が宗祖の教へに同じか同じでないかと云ふよりも、先づそれが私共を生かしてくれるか否かを先づ求めねばならない時代である。

□今日の多くの既成宗教家はそれが人を生かさずか否かを云ふよりも、それが宗祖の教へに同じか異ふを先きとする。而もそれが現代の人を生かさずか否かを全く問はない。

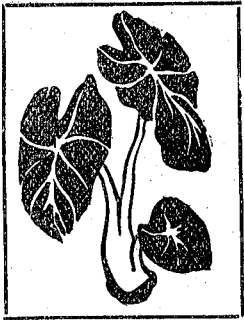
□けれどもそれが現代の生活を助けず、現代の人を眞に教はぬものならばそれは少くとも現代の宗教とするには足らぬではないか。だからして、現代を教はないやうな宗祖の教へならばそれはよろしく現代から葬り去るべしである。

□然に現代の多くの既成宗教家はそれが現代を生かさなくても、昔のまゝの祖師の教へでさへあれば宗祖に忠なる道かと思ふ。乍然之は其の實、宗祖に忠なる爲めに反つて現代に死んだものである。

□宗教の起原を見ればそこには色々の事象もあるが、それは一として其の時代に於て、其の人を生かさうとして現はれて來なかつた宗教は一つもない。それを反つて祖師に忠ならんとして其の時代を生かすことをしないのは其の實、宗教の本質を誤つたもの云はねばならぬ。

□だから、本當の宗教家、言換へれば眞に自らを生かし、且つまたその人を生かさうとした宗教は必ずしもその教へにこうでいて、昔のまゝを言葉や形式に捕はれるものではない。

□たゞ時と處とに應じて、眞に一切の生くべき眞實の大道に立つものである。而もそれが眞に又宗祖を生じ一切を生かす眞實の道である。そしてまた、そこに始めて眞實の宗教も常に進歩し發達して、一切の人を生かすことができるであらう。(念) (一九二九、一一、九、夜)



私の浄土観

土屋観道

□昔の浄土教は此の實實の世を去つてから、死後に西方浄土に生れるのが浄土宗として教えられた。従つて、それらの人々には此の土と云ふものがたゞ娑婆として厭ふべきところであつた。

□乍然それにもかゝらず、昔の人々は何故に此の土を捨て、西方の浄土に早く往くことを急がなかつたであらうか。それほど此の世が厭はしいものならば早く此の世を捨て、未來浄土に往生を急ぐのが本當ではなかつたか。

□それにもかゝらず、古來此の身を捨て、浄土を西方に求むることを仕ないのは、西方に身を投じて此の世に死ぬるより、尙西方に往くことを後にして、生を此の世に欲するのが本當の願いではなかつたか。

□之は私が從來の浄土教に對する永い間の疑問であつた。然乍ら、世には此の土を捨て、正しく西方に往生をすべく此の身を投げた人もあつたと聞いて、私の心は更に迷ふた。

□而も私の實際は浄土を願ふた、けれどもそこは必ずしも此の身を捨てば往かれないほどの浄土では

なかつた。最も病氣でもして、苦しいときには速く此の身を脱したいと思つたこともないではない。□けれどもそれは止むを得ぬ場合のときに過ぎない。それでも此の苦しみを脱して此の世に生きて居らるれば居りたいと思つた心がごしても其の根底にあつた。

□而も、それ以外の時は私の生活は常に二つの流れにあつた。或は明い方と暗い方との二面と云つてもよいのである。而も暗きを脱して明い方に進むのが此の世からなる往相の姿であつた。

□だからそれには必ずしも此の肉身の有無には關係がないやうであつた。否一面から眺むれば如來の光りは己に十方の中に満されてある。たゞ自分たちはその中であつて、自らのあさましい方面を此の光の中に脱すればよいとさへ思つた。

□言換へれば光明裡中の向上の生活である。恰も水の中にあつてハンケチの洗濯でもするやうなものであるとさへ思へた。汚れた方面が洗はれて、純白の方面が現はれるのがそのまゝ浄土への往生の相かに見えた。

□更に云かへれば己に如來の浄土の中に今や安心して自らの向上をはかればよいのだとの心さへした。自分のいたらぬを見れば暗であるが、如來の慈光を眺むれば一切は光明の裡にあるとさへ見えた。

□かくて念佛は慈光の中の向上の相であつた。此の世からなる往相の姿であつた。

二

□然に私の生活は近頃になつて、かなりの方向轉換が始まつた。それは往相から還相への轉換である。還相がそのまゝ往相の意味にもなつて來た。

□最も此の意味の萌芽が幾分か往相の中にもあつたと云ふことは往相の何者であるかを知つてゐる私

にはもとより、理窟としてはそれを認めざるを得なかつた。

□乍然私の生活の大半を理窟よりも事實として、如來を中心として此の世に活動すると云ふことはまだ往相を離れて別に無つたやうである。それは人を救ふと云ふことよりも、未だ自分の内面の苦しさ醜さが多かつたが爲めである。

□だから私の生活に自分が此の土に盡すと云ふ心より、寧ろ自分が此の土に盡せぬと云ふ方の反省が強かつた。否、それどころか寧ろ爲すべきことの爲せぬと云ふよりも、爲すべからざることを爲すことの多いのに苦しんだ。

□だから、そこにはたゞ一向に自らの苦難を脱すべく、如來の救いを仰ぐほか道がなかつた。それが私に於ては一向専修の念佛の一行であつた。如來の本願を一すじに合掌し、如來の救いを求めた所以である。

□けれども、その救いはたゞ私自身の良心の悩みを脱せんが爲めの願いではなくて、やがて如來の如

き作佛度生の生活が私自身に行へるやうになりたい爲めの靈化を希念する念佛であつた。人格の向上と従つて、此の願は私の生活の進むと共に其の志願も亦此の土に現はれざるを得なかつた。人格の向上とは人格ある行爲の實現である。佛となると云ふことは佛のやうな生活のできる人となると云ふことであつた。

□而も佛のやうな生活とは自ら佛となると云ふことも忘れて佛の如き生活に一切の衆生を成らしむると云ふことであつた。そして、一切の衆生を佛たらしむると云ふことは要するに一切の衆生をして、眞實の道に生かしむることである。

□それは自分が如來を中心として一切に生きる如く、又一切をして如來に生かしむることの外に何者もない。天地は一体であり、萬法は不二である。吾人は一切を天地の大道に任かせて、刹那に現生を

して眞に生かしむるほかに何ものもない。

□それが即ち往相の姿であり又還相の姿である、此の土の外に往相を求めず、此の外に還相を求めない、此の世を通して永遠より永遠に私は此の土にとゞまつて一切を生かせばよい。

□此の意味に於て、私の思想と信仰とは正しく天地と共に此の世を離れず此の土を通じて、眞實に生き生きて行くのである。それが西方の淨土を求むる相でもあつた。而て、今やその西方の淨土が此の世を照す光りとなつたのだ。

□西方と思つたのは單なる西方ではなくなつて、それは十方を照耀する宇宙の本源たる如來の光であつた。永遠より永遠に天地と共に無量壽光の輝きである。而も私は此の光より出で、此の光に育てられ、此の光と共に生きて行く。そこにのみ私の生命もある。

□永生と云ふも、不死と云ふも、如來の外に私は無かつた。一切の萬法は縁起である。天地は生命の現はれである。私のみが何で凡夫の現はれであらう。凡夫もそのもとを尋ねればそのまゝが如是の當体であつた。(二九、一一、九、夜。東京。)

アウグスチヌスの自覺

土 屋 觀 道

に載せることとする。

彼の「獨語」に。

此の程或る本を讀んでゐるとアウグスチヌスの自覺と云ふ題で書いたものがあつた。而もそれが如何にも私の常々云つてゐる宗教によく似てゐるので参考にまでこゝ

理性問うて曰く「汝を知らうと欲する汝は汝のあることを知るか」答へて曰く「私は知る」。

理「如何にしてそれを知るか。」ア、知らない。

理「汝は汝自身が單一と複雑いふことを感ずるか。」

「ア、知らない。」

理「汝は汝自身が自ら動くことを知るか。」ア、知らない

。

理「汝は汝が考へることを知るか。」ア、知る。

理「それでは、汝が考へると云ふことは眞であるか。」

「ア、眞である。」

理「汝は汝自身が不滅なるを知るか。」ア、知らない。

理「汝が知らない」と云つたもので、何を第一に知ら

うと思ふか。」ア、私が不滅であつたら。(と云ふこ

とである)。

理「それでは汝は生きることを愛するか。」ア、私は

それを自白する。」

理「汝が不滅であると云ふことを知りさへすれば、それ

で十分なのか。」ア、それは多とすべきであらう。併

し私には物足らない。」

理「物足らなくとも、汝はそれを非常に喜ぶだらう。」

「ア、非常に。」

理「もはや何物も歎かないか。」ア、何物も。」

理「永遠の生命と云ふのが、今此處で知つただけのもの

ならさうか。それでも歎かないか。」ア、否、私は生

きがひがないやうに歎くだらう。」

理「それでは、汝は生きる爲めに生きることを愛するの

でなく、知る爲めに生きることを愛するのだ。」ア、

その通りだ。」

理「その知識が汝を不幸に陥れるなら、さうか。」ア、

私は決してさう信ずることができない。若しさうな

ら、誰も幸福であることはできない、私の無知の外に

私を不幸にするものはない。知識が私を不幸にするな

ら、不幸は永遠のものである。」

理「それで汝の希望のすべてが分つた。誰も知識によつ

て不幸にならないと云ふことを信ずるから、知識が人

を幸福にする。生きなければ誰も幸福でない。存在せ

ない人は生きない、汝は存在すること、生きること、

知ることを欲する。併し生きる爲めに存在すること

を、而して知る爲めに生きることを欲するのだ。汝は

汝の存在することを知り、汝の生きることを知り、汝

の知ることを知つてゐる。」

之を以つて、彼を見るに、彼は自分が存在すること

と、生きることに、知ることを欲すると同時に、生きる

爲めに存在し、知る爲めに生きるのだと云つてゐる。

二

尙彼の言葉の中心には自己の不滅を知らうとし、いか

にその永生を愛したかゞ判る。而もその永生は決して單
なる永生ではなくして、生きがいある永生であつたかも
知ることができらるであらう。

私が信條の綱領の中に、吾人は永遠の生命と無限の向
上とを要求す、此の要求を充たすものが宗教である。永
遠の生命とは不滅の自覺である。無限の向上とは價値の
生活人格の完成であると云つたのと、殆ど一致する。不
滅と云ふのは自己の不滅である。然ば自己は何であら
うか。私はそれが何であるかを人に語り、人に之を知ら
しむることはできない、然乍ら、斯くの如く、語り、斯
くの如く筆を採るものが他の何者でもなくして、私その
ものであることを知つてゐる。而もそれがゐるとかゝるな
いさか、之を他の人に語ることも説くこともできな
い、然乍ら、それも亦、斯くの如く語り、斯くの如く筆
採る私が存在することは私自身に之を知る。而もその私
が死にたくない、生きたいのだ、不死を求めて、永生を
願ふのでした。無限の向上とは價値の生活である。價値
にも色々の價値があらう。けれども、それはともかくと
して、生きがいある人生の人でありたいのだ。眞と善と
美とに於て、私の生活が知情意の統一ある自己の生存で
ありたいのだ。たゞ生きて居ると云ふだけでは満足がで
きない、天地と共に不滅な私が天地と共に向上し發展し

て、生き生きて行くところに私共は生きがいを感じるの
でした。

私達は知らないものを愛することはできない、だから
私たちが眞に私達自身を愛するならば、それが眞に何も
のであるかを知るべきである。そのとき、眞の自分が單
なる此身、此の心でないことを知るであらう。不滅の自
分は天地と共なる永生の自己である。價値ある生活はそ
の自己と共に生きるの人生である。而て、その自己は單
なる外見の肉體や單なる外的人の心に之を見るものでは
なくして、誰人も考へることのできない、又見ること
できない、自己の内心の奥底に嚴としてそびゆる自己そ
のものの中の内的反省の直観によつて之を知るべきである
です。(二九、一一、一一、朝——東京にて)

所 感

名古屋 尾上銀子

浄土まは遠きにありき思ひしに

御名よぶまにこに佛まします

人の道ほそかられどもぼんのうの

草のしげきにまよひぬるかな

生きろる妙味

中野 勉 子

□生きてゐる樹は芽をふく、始終伸びて居ります、夏でも冬でも育つてゐる。

□信仰も古株になつては駄目である、周りは太くとも、一寸の芽もよう出さぬような、死物になつては駄目である。常に若々しく、常に求め、常に成長して居らねばいかぬ。

□見上ぐるばかりの太木でも、葉一枚着けて居らぬ枯樹は淋しい、一寸の苗木でも二葉を開いてゐる芽子は勢ひがいゝ。我等は常に芽子でありたい。

□師走でも正月でも常に芽子である。私は子供の頃のようには正月でも正月らしく面白くなく、そして師走でも師走らしく忙しくない、いつでも同じような緊張と張合とを感じてゐます。何だか一年中が一本の鐵の棒のようには垂るのみも緩みもなく、常に「もう一息く」とますますく力付いて行けるように感じてゐます。

□改造でも、發明でも、修養でも、金儲けでも、一朝一夕に出来るものではありません。絶えず注意して居り、専心努力して居ればこそ、その効果が闕然として目の前に現はれるのであります。恰度水河が、流れるか流れぬがわからぬ程の速度で、山を下つて行くのだが、而かも

其の河底の岩石を削り取つて行くこゝは素晴らしいものであるように、念々利々に積んだ苦心が終にパツと花を開くのであります。

□洞山大師は寶鏡三昧に「潜行密用は愚の如く魯の如し、只能く相續するを主中の主と名づく」と謂つてゐられるが、悟りといふことも、念佛といふことも是の外になく、成功といふことも救世といふことも此の外にない、□「汝等絶えず祈るべし、事毎に感謝すべし」と云つたパウロも、「念々稱名常懺悔」と云はれた聖者も、此の平凡な真理の体験者であります。「所在道場」といふことは佛者の信仰であると共に、商人の信條でなければならぬ。いや佛者だ商人だと區別はいらぬ、人間それ自体の「生きる真理」でなければならぬと思ひます。

□我々は糧の爲めに生きてゐるのではありません。タイム、イズ、マネー、勞働是賃金と、人生を金錢に妥換して、得たりと濟ましてゐる者には「生きる妙味」はわからぬ。肥えたとか瘠せたとか、得たとか失つたとか云ふ以上に、我々は「生命價値の増上」といふ大任がありませう。此の使命を遂げることが「生きる悦び」でありませう。

念佛と生活(二) (前號續き)

土屋 觀 道

六

△「それでは彌陀の本願と現世利益の關係はさうなりませうか。」

○「私共は彌陀の本願を知る前に更に一應心得て置くべきことがあります。それは彌陀の本願が何故に起つたかと云ふ点と、それが起らない前の佛敎が如何なるものであつたかと云ふ点であります。此の点を明にすれば同じ土地に居り乍ら、迷へる人の境涯と悟れる人の境涯とが異ふ点が明になり、又悟りの世界と迷いの世界とが異なるものであるかを幾分か判つきりすることができると思ふのです。一と二と和へて三となり、二と五と和へて七となること云ふことは淨土も穢土も其の理に變りはありません。又淨土での白が穢土では黒となるわけもありません。乍ら迷つてゐる間は苦しいとのみ思はれてならなかつた此の世のことも、悟つて見ればさまで苦しむに足らない喜ぶべきことであつたと思へる世界もあります。而も同じ一つの事件でも之を見る人によつて其の見方を異にし、其のものに對する動作によつて之を淨土に變ずることできます。従つて、その人の之に對する心境は

一切が不快の念として現はれる事もあり、或は喜びとなつて現はれる時もあります。佛陀の世界はそれが宇宙の眞理に相應した境涯であり、凡夫の世界はそれが相反した世界であります。而も佛陀の心は凡夫の世界を見て、自分と等しき安養の世界たらしめやうとするところに佛としての慈悲が現はれ、凡夫の心は自己の本心から佛陀のやうな境地に到らうとするところに、向上の心があるのであります。而も悟れるものには迷へる人を救濟し、迷へる人には眞に悟らねば安心ができないのが、すべての人の本心であります。そこに覺者には佛心大慈悲の心が動き、そこに凡夫には極樂往生の願心も萌さすのであります。而も私の信するところによれば、それが二つ乍らに人類自然の根本要求であつて、宇宙の一大生命が此の二つの方面に現はれて、宇宙統一の力となるのではないかと思ふのです。前者を佛心の活動と云い、後者を求道心の發動と云ふのです。

△「……………」
○「彌陀の本願と云ふのは即ち此の佛心大慈悲の活動が衆生救濟の上に方便として現はれたのであつて、衆生の

念佛はその本願に乗じて、宇宙の生命に歸一せんとする心の發動と見るのであります。

七

○「然に茲に注意すべきことは佛教本來の立場から云へば、私共自身が自ら佛となると云ふことにあるのであつて、而も佛となる云ふことは自ら宇宙の眞相を徹見して、其の眞理に従つて此の身を所するにあるのであります。謂換れば自分自身が宇宙の大生命の現はれであると共に、此の大生命と一なることを深く悟つて、それと共に生きるのが佛教の教へであります。従て、淨土教の教へと雖も其の教への究極するところに致れば、彌陀の淨土に往生するのも身自らに如來に等しく佛となると云ふことにあるのです。而て其の佛となると云ふことはさう云ふことであるかと云へば、それは聖道門で云ふ所の佛と決して別なものではないのです。之は佛教の發達上、聖道門が先きに現はれて盛んとなり、其の理想としては、愈々佛としての眞實の世界を開顯したのであります。淨土教と云へども決してその佛としての理想世界を否定するものではありません。否それどころか人生究境の天地としては益々之を慕つて止まなかつたのが、寧ろ淨土教展開の眞相であります。乍然それだけに又之を現實に求め、實際に要求したのも淨土教徒の一大特色であります。

した。

△「……………」

○「然に人類の生活はあまりに理想のみ高くして、其の實行の生活は之に遅るゝことが多いのでした。即ち實際に於て此の現實はあまりにも非理想的であり、その中に住む各人の生活はまたあまりにも醜惡の生活であることを知りました。そこに永生と向上の要求が淨土的未現往生も求めて止まぬことになつたのでした。けれども茲に注意すべきは現實の否定と云ふものも、それはたゞ理想に反する現實の否定であつて、現實のすべてを否定するのではなかつたのでした。」

○「従つて、眞の淨土教徒の願は現實に於ける最善の生活を要求して、而もその能はぬところに未來の淨土を願ふのであつて、其の實、未來往生を願ふことの安心決定は直に此の土に於ける生活の安定を求めたのであります。而もその念佛の生活は佛としての生活を要望して止まない結果から來ものでありますから、此の世に於ける私共の爲し得べき最善の力は一切の生活に於て、此の土の最善にまで生きて現はるべきであります。このことが判らないと眞の淨土教の立場が判然しないのであつて、厭離穢土欣求淨土の思想もたゞ現實否定と見誤るの

であります。捨身往生の考へもそこから起つて來たのであります。而もかうした考へは昔の人々には可なりが多かつたことかと思ひます。乍然今日の社會には今やそれが入れられない思想となりました。それが時代の相違であります。それは汚れたハンカチを洗ふが如く汚れた方が娑婆であり、清い方が淨土であります。汚れた世界から清白の世界を淨土と云い彼土と云います。而もその彼岸に到るには念佛と云ふ洗濯必要であります。肉慾も財慾もその爲めならば悪いことではありません。さうした社會運動を菩薩の大業と云ふのであります。人格の高まると云ふことも此の仕事の外に何かありません。

△「然し念佛する人が病氣が癒り、金が儲かり、人格が高まると云ふことはさうしたわけです。」

○「それも亦佛教の原理に基くものです。尤も念佛の起りから云へば此の世に於て、思ふやうによくなれぬ力無き人々が彌陀の本願にすがつて、未來往生を願ふのが淨土教の起原かと思ひます。乍然こゝに考へねばならないことは淨土教ならざる多くの聖道門に於て、殊に其の大乗佛教に云はれる天台宗や眞言宗が現世利益を説くことです。それも見やうでは現世利益は本來佛教の説ではない、それは外道の侵入である。従つて、淨土教に之を説

かぬと云ふことは寧ろ佛教の本源に歸つたもので、それを今更に取り入れる必要はないと云ふ人もありません。乍然それも又一應の眞理ではあります。果して宗教には現世利益はないものでせうか、尤も世には之をあまりに取り過ぎて、人類生活を誤り、醫術や經濟、其他人間社會の道德までも無視することは許よりとるべきことではありませんが、或はまたあまりに之を否定して、反つて眞實の價値までも無くすることはさうかと思ふので

△「……………」

○「此の点は更に佛教全体からも見るべきであります。更に進んでは宗教全体、若くは人類の精神と社會生活若くは、人類の精神と肉身關係の上にも今少く科學的に、研究すべきであります。乍然かゝる事柄は今のところ一朝一夕にその証明もできぬが、私の信する所を以つて之を云へば佛教は感病同源を云つて居るのであります。従て此の社會的欠陥、若くは個人的色々の失患も主として、之は私共の天地の法則に反いた業報だと云ふのであります。従てかゝる業報を脱し、眞實に歸るの方法は佛教で云へば、之等を宇宙の大道に歸一せしむる外に眞の醫藥も職業も道德もないのです。謂換ればぎんなに衛生の道を構しても其の人の心行が天地の大道に反い

て居つたら、決して其の人の病源がとれるものではあり
ません。従て若し眞にその人の病氣も癒したいと思ふな
らば先づその人の病根を癒さなければならぬのでせう。
而てその人の病根を癒すものは此の佛教の教の外にない
と云ふことにもなりません。」

八

○「尤も佛教以外に之を癒す方法がないとは云はぬが、
若しも佛教の教ゆるところが私共の身心をして天地の大
道に合せしむるものである限り、凡そ人類の病源が天地
の大道に反するところから來ると云ふ点に於て、それが
今日の醫術の教ゆるところとも決して反するものではない
かと思ふのです。而も私共の身心をして天地の大道に
歸せしむる点に於て宗教と醫術と果して何れが勝つて
居るのでありませうか、その病源の根底を癒すに至つて
は眞に宗教ならざれば到底不可能ではないかと思ふので
あります。之私が眞に佛教を信じ念佛を申すものは其の
人に於て、病氣も癒り、身心も健全となると主張する所
以であります。かく云へばとて私は一概に今日のすべて
の醫術を排斥するものでないことはもとよりであります。」

△「なるほぎ、さう云ふやうな意味の病氣ならば或は癒
るかも知れませんが、乍然それは單なる神経作用にすぎぬ

ならそれは私の今云つた方が本當と思ふのです。多くの
人々は此の理由を知らないで徒に之を批難したり、或は
みだりに現世利益の迷信に、陥る人があるかに思はれま
す。乍然それは私の悲みとするところであります。」

△「……………」

○「中にも私の最も氣にくわないのは此の現世利益と云
ふことを悪用して多くの人々から金をとつたり、或はま
た、病氣平癒や金儲けに利用して、眞實に生くべき人類
の開發を無視しやうとする利己主義の生活であります。
乍然之は少くとも私共の人類生活に於て深く反省すべき
ことであります。」

△「いや、實は私もそれが心配でならないのでした。」

○「それは私も同感です。乍然それと同時に今一つ大い
に私共の注意すべきは此の念佛の信仰が私共の今日の生
活を指導し、身心共に健全にして、一家を榮え、一國を
安穩ならしむる偉大なる力のあることであります。之私
共が特に天下に呼號して止まぬところでありますが、實
に念佛は私共の身心を改造し、一家一國をして眞に榮え
しむる中心の生命であります。肉身の病氣も、生活の困
乏も、人格の根底から之を改造するところ、何ものもの之
に及ぶものはないのであります。」 (四、八、一一、遊にて

一四、一〇、二三、再校一四、一一、一三、校一四、一一、二、校改)

ものではないでせうか。」

○「勿論神經と云へばそれに違ひはありません。乍然神
經作用と云ふことはあなたの云ふやうな軽い意味ではな
くして、今少し重大なものではないかと思ふのです。凡
そ人類の生活に神經の作用せぬものはありますまい。従
つて多くの病氣はその初め神經作用によらぬものとは
ないのです。従て私共の生活にして常に心を淨め、爲す
ことすることすべてが如來の慈光の裡ならば、私共の身
心も自然のうちに無理がなくなつて、すべてが順調に行
くやうになるでせう。従てそこには一切の病源も自ら清
められ、萬事が健康の状態に復することは云ふまでもな
いことでありませう。」

○「又従つて、一家の平和も自ら保たれ、一村の繁榮も
自ら來ると云ふものです。一市一國の繁榮も遂には世界
の平和發達もそこに來り、經濟的にも人格的にも自ら順
調に至るのが本當ではないでせうか。此の点私が念佛を
申すものは人格も高まり、金も儲り、体も壯健になると
云ふ所以であります。」

△「何だかそれならば私も信ぜられるやうであります。
でもさう云ふ見方ならば從來の人々の云ふやうな現世利
益とは大分違ふではありませんか。」

○「或は異ふかも知れませんが。然乍ら若しもそれが異ふ

◎理窟はあとから

□理窟はあとから考へたものだ。何ごでも理窟はたいがい
でよい。理窟よりも事實が大切だ。

□くだくだしい理窟をいくらこねても、行いがそれに伴はな
いでは仕やうがない。行いさへ本當ならば理窟などはどう
でもよいのだ。

□昔の人は論より証據と云ふことを云ふ。証據は論理以上の
事實だ。不言實行と云ふこともある。之も亦理窟より實際
を尊んだ事實である。

□理窟は事實に至るまでの前提だ。だから一切の事實の前に
は何等の理窟がいらなくなる。(念)一九二九、一一、九夜

三河の風來寺山に佛法僧の聲をきいて

名古屋 榊木よれ

夢の世のれむりませよもすから

佛法僧の聲をきいて

風來に佛法僧の聲をきいて

峰こしに見る月のさやけさ

山ひこのさけひ絶えなる風來寺

十六夜の月に佛法僧の聲

九州に歸りて (二) (四月號)

土屋觀道

三、柳河に行く

○日田から其の足で柳河に行く、光樹寺に着いたのは其の夜の七時であつた。御任職は布教の爲めに出張中で不在であつたが、其の奥様や道友の方々に會ふことができて何よりであつた。あまりに久々なのとなつかしさとで夜のふけるのも忘れてしまつた。

○翌朝十時半頃神谷(善之進)氏が博多から來られた。此の日は山崎(よし)氏の御宅での集りであつた。集る方々は七八名に過ぎなかつたが十年以前の道友ばかりであつた。信仰の質疑などもそれからそれと引切りなしにはずんだ。殆ど終日信仰のことばかりであつた。

○二十一日は早くも郷里へ立たねばならなかつた。それは彼の地で今日から三日間の三昧會がつとまるからであつた。一同記念の寫眞をとつた。柳河の天地には何となく如來の慈光が充ち満つてゐるかに覺えた、春の日ののびやかさが朝日と共に輝いて來るのを覺える。之もひさへに道友の心からなる集りによるからである。(四、四、九、午前二時半東京にて)

四、古郷の集り

○郷里の大法寺では此の日(三月二十一日)から三日間の念佛三昧會が開かれた。私が親の年回で歸つたのを幸に當寺の立川上人の發起である。毎朝四時から午後四時までである。集る人々は近村の道友で熱心な人々ばかりである。人数は三十人から五十人に過ぎなかつたがお互に知り合つた人々の集りのこゝとて皆喜びの限りであつた。

○初日の夕は兄の宅で法事であつた。三四十戸ばかりの村人を集つて頂いた、僅に型ばかりの法要ではあつたがかうして知人の集りの中に両親と兄妻の年回を營むのは又棄て難いものがある。親籍の人も集つたり、長兄は博多から全家で來た。東京の弟が一人來ないばかりであとの兄弟は四人とも皆集つた。親たちの心も満足であらう。

○夜は寺の方で信仰會の方から招待をうけて歓迎會が開かれた。集るものは八九名に過ぎないが十數年來の道友ばかりである。私にはそれが何よりの楽しみであつた。

五、古里の思出

○それにつけても、私の一つの悲しみは私の生れた村人の人達が殆ど一人として信仰の道には入らないことである。それには私の努力も足らないからかも知れない。乍然それにしても、私共の宗教傳道に對しては恰も馬耳東風の如くである。

○村人の心には靈界のことが判らなくなつたのか、このことは去る三月の十五日の氏神の祭禮にも殆ど村人の心はそれらしくにも見えなかつた。たゞ金錢と名譽とのほかに眞に生きるべき何者もないかに見える。

○私の幼少の頃にはそれほぎにも無つた、否少くとも私の心には心から氏神を拜んだ經驗がある。そしてまた私の子供の一家には確に氏神祭禮の氣分が充分にたゞよつてゐたのを記憶する。而もそのなつかしさは今日も尙私さして此の古里をあこがれのひとつとするほぎであるのだ。

○然にその後二十年、私には今やさうした村人の氣分を知る事ができなかつた。之は確に現代に於ける一般宗教の退えいによるが、かうした町の田舎にまで物質萬能金錢崇拜の風のみ吹かれることは決して帝國の前途にも樂觀すべきことではない。

○私が村を出てからはもう二十四五年にもなる。昔の言葉を借れば私も己に初老だ、氣分から云へば初老なごとは以つての外で、私の氣分は未だ三十前後の昔のそのまゝだ、乍然既に私の知つた村人を數えればその大半は死んだ人ばかりである。私が歓迎せられないのも無理がない。

○さびれ行く村の姿よ、私はいかばかり御身を愛したか、之でも私は愛郷の念が一パイだ、そしていかばかり御身を戀することよ。幼なかりし昔のこととも、急しき身の中にも、いかばかり私は御身を思出だしそれを樂しむか判らない。古里は實に私にとつては又とない樂園の一つである。

○私の此の世に生を受けたところ、我が父母の生れし古里、山も川もそのまゝに、私の昔をしのぼせる。朝な夕な或は學校の通學や、或は四時の山遊び、川遊び一として昔の思出でないものとはない。

○久々で八幡神社にも詣でた、そしてまた御嶽山にも登つた。三十年も昔のことが恰も昨日のこのやうに私には思い出されて、その自然のまゝがなつかしい。

六、昨今の私

○「男子志を立て、郷關を出づ、學若し成らずんば死し

て歸らず」と。之は誰の作だか私は知らない。乍然私は之を幼少の時からいかにばかり楽しんで吟じたことか。そして此の詩がいかに私を勵ましたか、それは私が郷關を出でてからも永い間であつた。

○乍然今の私にはそんな心はもうとうの昔になくなつた。それよりも今の私には手を空うして古郷に歸ることだ。昔のまゝの童心の心になつて、昔のまゝの古郷に歸ることだ。錦を着て古郷に歸る」と云ふ古き諺もあるが、そんなことは他の人に任かせておく、今の私の望みではない。

○今の私は一切の學を捨て、古郷に歸るのだ。そして昔のまゝの空手に歸ればよい。幼なかつた昔の私、いかにそれが私にとつて、なつかしいことか。朝も毎朝三時から起きて、勉強した。父母の膝下に麥飯を食い乍ら、一

吾朋便り

○伊勢 谷口年春様より
めつきりお寒くなりなりました。皆々様如何に消光遊ばされます御事かとおうわさ申上げて居ります。

當地のお別時は一月五日より三日間と

中野様、行基寺様、伊藤留吉様はお越
し下さる事にお約束済みでございます。

○大阪 豊田省三様より

去る四日附のハガキ正に拜見いたしました。上人にも爾來御健勝に入らせられます事をお喜び申上げます。仰せによりまして禮拜儀貳十部不取敢半田學純様へ向けお送り致して居きました。

○佐屋 黒宮平八様より

昨日は、こま／＼なる御手紙頂き嬉敬拜見致し條。當方庭の木々の梢も去別時中は實に眞盛にて、毎日平均廿五名づ、道友相集り、御蔭を以て盛大に相勸申候間乍憚御安心被下度候。其後一向に便り無之候間、若や何方様か御不快に在はしませんやと御案じ申居り處、先々皆々様には御揃ひにて御活動之條は何より存じ上候。

○東京 土屋觀道

今年も愈々終りとなりました。いつも云ふことではあるが、一年の過ぐるのは實に夢のやうです。各地の道友にも御障りはないでせうか。御案申して居ります。殊に近年は日本も不景氣つゞきで弱

生懸命に勉強した、あの時の純な心、私はそれらの時代がなつかしいのだ。

○それでも「錦を着て古郷に歸れ」と私に云ふ人があるならば、「この我を見よ」と私は云つてやりたい。私達には生れ乍らにして佛性があるのだ。この佛性を研ぎ、此の佛性を開發させて、古郷に歸へる、それが即ち「錦を着て古郷に歸る」のではないか。

○此の外に何の錦だ。世の多くの人々はそれを知らない。そして反つて、最も汚れたる金や名譽や位を以つて眞の錦と思つてゐる。乍然それは決して永劫に輝く眞實の錦ではないのだ。

○衷むべし、世の多くの人々は之を知らない。そして此の叫びが耳に入らぬのだ。(四、四、九)

決めさせて頂きます。中でも十名ばかりの信者の方々は、五日でも一週間でもといふ熱心さでございます。當地としては始めての試みです。

既に入信なさつた方々の信仰を一層深めて頂く爲にも、或は未信の方、反對なさる方々、一の宣傳の意味から是非各

はられてゐますから、各地の道友にも其の爲めに御困りの方も多からうかと思ひます。人ごころも思へず何となく心を痛めさせられます。

私の一家も今年には可なりに苦められました。昨年の末から今春の初めにかけての長女の病氣や、九月の初めから中頃にかけての次女の入院で可なり人間味を感じさせられた感じがします。經濟上にも少なからぬ苦痛を見ましたが、それによつても今日の社會一般の不景氣を思はれて、一層社會改善の必要を思はされてなりませんでした。

乍然又一面には昨年以來あまり各地には出ないこととしてゐました爲めに、子供の病氣についても充分に落ついて其の看護も出来、又近年にない家族の眞味も味はされた喜びもあります。又二三の出來としては今春久々で郷里九州に歸つて両親の年回をすました事や、十何年ぶりで柳河の道友を御訪ねした事、其の他近年にないしつくりとした讀書と思索の出來た事は何よりの喜びです。

今のこころ、一家も無事一同も喜びの

地先輩の方々の應援をお願ひ申したうございまして、案内を「眞生」に發表して頂きたうございます。

僕は二月には上京してしまひますので、僕の居ない後にも皆さんが熱心にはげんで頂けますやうに、此の別時には全力を注ぎたいと思つてゐます。

中に暮して居りますから乍他事御安んじ。

尙作序、私は最近まで年末年始の御いませぬこととして居りましたが、其の勸めあり、昨年と今年とは其の返禮として御ハガキを出しましたが、來年からはまた從來の通りに其の催を止めやうと思ひますから、之も爲念御承知を御願申して置きます。見やうによつては年に一度の年始としてハガキの一枚位御出す事によつて、其の平生の疎遠を謝し、尙將來の御愛顧を願ふことは決して悪いこととは存じませんが、それも段々習慣となつてはたゞ一偏の儀禮にござまり、中には前年から謹賀新年のハガキを書いたり、時にはたゞ一偏の印刷になつて、人をして其の表紙まで書かせることふ事になり、出した人も受けた人も單なる一つの氣休めに過ぎぬ事なるからであります。それに自分で右のやうな型ばかりのやり方は面白くないし、かと思つて一々自分で筆にまつと其の爲めに二百枚のハガキに二三日はろくろく讀書もできず、又皆さんの御ハガキを一々特

に長々さかされた御便りなごさても一度にそれを讀むだけでも大へんですから、此の際やつぱり従來の通りに又その年始の禮を欠くごにきめました。それに毎月かうして「眞生」を通じて御便りもしてゐます事ですから、此の點お互の心も判つてゐる事としてその點の心やす立て

あるごきを御許し下さい。でも眞生も讀んで頂かない方々であまりにも、久々の方には或は此の例を破つて又御伺いのハガキを出す事もありませう。尙最後に當つて皆様の御健勝と來年の御奮闘を慈光裡中に御祈り申して止みます。(三〇)

伊勢大石別時念佛三昧會御案内

時……昭和五年一月五日より七日まで三日間
所……三重縣飯南郡大石村不動院

參宮線松坂驛にて松坂鐵道に乘換え、終點大石驛にて下車、約五丁、自動車の便あり。

○中野善英様導師、行基寺様、伊藤留吉様御隨喜決定。

當地は最近土屋上人始め中野神谷兩師及び先輩の方々には毎月お越しを願つて眞生運動を起してゐます。入信の方々の信仰を一層深め、未信の方々への宣傳の爲にも、是非各地先輩の御來會を伏して懇願致します。

主催 眞生同盟大石支部

誌代拂込並ニ寄贈者御芳名

- 金六拾錢 柏崎 内山作次郎様 ○壹圓 柏崎 山田健次様、中村利平様、福島 佐々木春治様、大阪 山本荒様、大垣 和田清兵衛様、神奈川 石渡勇様、静岡 吉村操様、東京 難波英定様 ○壹圓五拾錢 大阪 古座谷武兵衛様 ○貳圓 柏崎 大橋爲三郎様、歌方ちい子様、後藤甚次郎様 ○參圓 三重 服部うた子様 ○名古屋拔 ○金拾圓 伊藤留吉様 ○金壹圓 小田のお子様

二八、六〇

(大正十四年八月十三日) 昭和四年八月十三日

昭和四年十二月十日印刷納本

(每)

日發行)

第八卷 第十號

本誌定價

一部 金 十 錢 郵稅共
半年 金 六 十 錢 全
一ヶ年 金 一 圓 全

註文の注意

●購讀希望者は代金を添へて御申込下さい
●誌代は總て前金御拂込の事
●送金は振替によるのが便利
です

昭和四年十二月十日印刷納本
昭和四年十二月十二日發行 行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 土屋 觀道

編輯人 土屋 觀道

名古屋西區隅田町二一番地

印刷人 百々治之助

電話西(5)二九三番

名古屋東區錦屋町二丁目

印刷所 藤田山田活版印刷所

電話東(4)二九三番

東京市芝區芝公園十四號地

發行所 眞生 には
振替口座東京四七二八には全